

黒潮町地域における漁家民宿を中心とした地域活性

1130492 松本 侑子

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

第二次安倍内閣が発足し地域活性化は重点課題の一つとして取り上げられている。「復興・防災対策」「成長による富の創出」「暮らしの安心・地域活性化」という三つを重点分野として掲げており、日本における重要な政策課題の一つであることが見て取れる。本稿で取り上げる高知県は、全国でも少子高齢化や過疎化が重点課題とされている地域であり、その地域の中でも県西部に位置する人口 11,000 人前後の黒潮町においては、相当に危機感が強い。私は、この地域において、住民と行政が一体となって真剣に取り組む地域活性化の現場に直接的に関与しながら調査を進め、筆者なりの解決策を模索するということを卒論テーマとして設定した。

2. 背景

高齢化率 32.2 パーセント。高知県内の中でも、少子高齢化が大きく進んでいる黒潮町。その上、平成 24 年 3 月 31 日には、南海トラフの巨大地震による震度分布・津波高の推計が、内閣府から第一次報告として公表され、その中で、黒潮町は、「最大震度 7、最大津波高 3.4 メートル」という大変厳しい数字がしめされている。この数字は全国第一位である。観光面では、漁家民宿、黒潮一番館、天日塩などが有名である。その反面、観光客数は、伸び悩んでいる。なぜ、「漁家民宿」を中心とした地域活性を本調査研究のキーワードにしたのか。「農家民宿」は高知県も含め、全国各地で開設されているが、「漁家民宿」と言えば、高知県黒潮町と考える。全国で数少ないこの「漁家民宿」に自信を持って、全国に発信していくことが、本研究の大きな課題となっていく。

以上のことから、黒潮町では、「漁家民宿」を中心として、どのような方法を取るによって、黒潮町全体の地域活性化が図られるのかを地域全体で考えていくことが求められている。

3. 目的

本調査研究では、黒潮町の観光客数の増加に寄与する方策を考える。まず、黒潮町の現状を把握する。漁家民宿の半月間にわたる住み込みのインターンシップを行い実地調査する。これら踏まえて、観光客数が増加することによって、地域も元気になり、活性化されていくという「地域活性化のサイクル」を考案し、具体的なプランを作り上げていくということを目的としている。

4. 研究方法

本調査研究では、どのような策を取れば、漁家民宿を中心として、黒潮町地域を元気にし、地域活性化へとつなげていくかを論文の結論としていきたい。

まず、公表資料データから、黒潮町と隣接地域における現状を把握する。次に、私が半月間、黒潮町の佐賀地域にある漁家民泊 8 件中 4 件に、3 日～4 日ずつ泊まり込み、地域のワークショップに参加しながら、丁寧に聞き取り調査を行った。さらに、その後も定期的に現地を訪問し、イベントにも積極的に参加した。さらに、黒潮町長の大西勝也氏と、広報担当の福岡和加氏からも現状と課題をヒアリングした。こうして、公表データのみならず、「足で稼いで」得られた情報や知見を基に、黒潮地域の観光客数増加に直接的に寄与するような地域活性化サイクルモデルを私なりに提示したいというのが本稿の挑戦的な試みである。

本稿は、まず第二章で黒潮町の現状と問題を提起し、第三章で私なりの地域活性化を定義し、実際に成功した事例（青森県南部町達者村の農家民宿）を挙げ、第四章で漁家民宿の現状と問題を提起していく。第五章で、観光ビジネスを活かした新たな「まちづくり」と題して、黒潮町にある観光資源と、隣接地域（黒潮町大方、四万十町（窪川）、四万十市、宿毛市、土佐清水市など）の観光資源、取り組みを提起し、私なりの観光プランや観光資源の有効活用方法を挙げ、第六章

で結論を述べたいと考えている。

5. 結果

本研究の結果、現在の黒潮町は、観光資源はそれなりにあるが、それに担うイベントが単発的のことが多い（T シャツアート展、鹿島大祭、戻りガツオ祭等）。イベントが行われている時期は、観光人数が多いが、イベントがない時期は、やはり観光人数も減少し、地域に「元気」を感じられなくなってしまう。だが、ひとつ視点をずらして地域を見てみると、まずは、隣接地域（西だと四万十市、宿毛市、土佐清水市、東だと四万十町）と連携を取るようなイベントや観光プランを企画することによって、観光人数の増加、地域の経済効果がみえてくるのではないかと。

<「テレビ」から見える地域活性、経済効果>

過去に、「龍馬伝」が放送されてからの高知市では、龍馬効果で経済波及効果が2009年10月の時点で試算は234億円だったが、2010年4月の時点での試算が409億円と倍近くの数字を叩き出している。このことより、テレビやインターネットの情報は、地域活性につながる大きなキーになっていることが分かった。昨年10月からは、四万十市を舞台としたドラマも放送されており、龍馬効果ほどなくても、現在よりは、四万十市も観光人数、経済効果も増加すると考えられる。観光面での隣接地域との連携は、ロケ地巡りと民宿宿泊などを組み合わせたプランを制作していけば良いと考える。

<黒潮町地域活性>

黒潮町の主な観光資源（漁家民宿、黒潮一番館、天日塩）を使っただけのビジネスは現段階でも行われている。今以上に地域を元気に活性化させるためにはこれら以外の観光資源にも目を置かないといけない。佐賀地域には、塩屋の浜という佐賀でも自慢の浜がある（漁師さんたちが毎日早朝に浜へ出向き、清掃を行っている）。この浜を有効に使って何かイベントを起こすことは出来ないのだろうか。夏は、海水浴場として使用されている。冬場広い浜で出来ることを考え、それらを主な観光資源になっている、一番館でのタタキ体験や、漁家民宿への宿泊と連携させるプランを考えるのも一つの手だと考える。

これらが、本論文で研究、調査を重ねていった結果である。

6 対策と提案

対策として、まず、地域住民と行政が話をし、企画、行動に移すと失敗する可能性もありうる。類似地域（例として青森県南部町達者村の農家民宿）や「まちづくり」という形で地域活性が成功している地域について学び、理解した後、企画、行動に移していくことが地域活性を成功させていくゆえの対策だと言える。そして、ここでの大きなキーは、隣接地域の行政との連携だと考える。観光プランを考える際、自分の地域のみでの企画は、まず不可能に近いので、両地域の強み、弱みを互いに共有し、行動に移していくことも対策のひとつと言えるだろう。

7 今後の課題

今後の課題としてまず、第一に挙げられるのが、地域住民と行政の連携強化だと言える。地域住民が望むことや企画したいことなどが、出てきても行政との連携が取れていないと、地域活性につながるような計画も思うように進まなくなってくる。地域住民と行政が同じ考えを持つことも大事だからワークショップや議会などでお互いの意見を理解し合い、地域活性化へむけてともに歩んでいくことが大きな課題である。そして、隣接地域とも、連携を図り、イベントやプランを企画し、実行に移していくことでお互いの地域の観光人口増、地域活性化へとつなげていく課題だと考える。

[参考文献および URL]

*本調査研究は、先行研究のほとんどない黒潮地域を調査対象としたため、参考文献が少ない。

黒潮町 HP : <http://www.town.kuroshio.lg.jp/>

四万十市 HP : <http://www.city.shimanto.lg.jp/topj.html>

幡多広域観光協議会 HP : <http://www.hata-koiki.com/>

SAGA 体感ネットワーク HP : <http://sagataikan.jp/>

よさこいネット HP : <http://www.attaka.or.jp/>